

おい図書館



発行 おい図書館

代表 青木和子

松本市牧原 1-104-418

№141

TEL 047-311-0886

・院内集会・・・

図書館の振興と発展を

めざす懇談会

報告 青木和子



2009年11月19日(木)、衆議院第2議員会館会議室において、図書館関係市民団体と国会議員による初めての院内集会在開催されました。

図書館友の会全国連絡会と日本図書館協会が国会議員に働きかけ、市民・マスコミにも呼びかけて周到な準備を重ねた結果、多数の国会議員や秘書・マスコミ関係者・市民など計166名もの参加となりました。(「おい図書館」からは大久保・青木参加)

先ず、図書館員連盟の細田博之氏、活字文化議員連盟の中川秀直氏、田中康夫氏他各会派の議員からの発言があり、その後図書館情報大学名誉教授の竹内惣氏の講演。そして、各地の市民団体から現状や問題点などが報告されました。

2010年は「国民読書年」です。先進諸国の中で、図書館数・専門職員数・資料費などで大きく立ち遅れている日本の現状をふまえて、「地域の情報の拠点となる公立図書館」「すべての国民の知る権利を保障する図書館」の振興・発展をめざして、国会議員や市民が一堂に会する初めての集会となりました。

竹内惣氏の講演は僅か30分間でしたが、大変充実した内容でした。

竹内惣氏講演抄録

これからの若い人たちのために

公立図書館

学校図書館について――

これからの日本の若い人たちのために、今年長考として準備すべきこととして次の3項目にしばり話されました。

1 図書館とは人が育つ場

・長い間、図書館は保存の場だった。1950年代から序々に、本を集めて貸し出すところとなった。

・図書館は本来、人が自立し自律できるように、一人一人が自分を育てる所であり、そのための援助をする所。貸出しはその仕事の一部であり、豊富な経験・知識・センスが必要である。

・援助の実例として

①本の面白さを知らせ・自発的な読書へと進めるようにする。
②情報や知識がどこにあるかを知らせ、自分で探し調べる力をつけられるようにする。

③挫折から立ち上がるモデルとその方法を知らせる。本はそのための大事な材料のひとつ。へ「100人の内、成功者は一人。後の99人は敗者。私はその99人のために書く。チャールズ・シユルツ」

④読書は、子どもの一生のうちの仕事のひとつ。その子の「今の読書」は、長い時間観を持って見るべきだ。

⑤読書は一人一人の「心のひだ」の中のこと。そのひだを大切に育てる。

⑥親が子どもの読書を大きく育てるように、阻害せず、面白いと思っ
て読むような環境をつくる。

⑦公立図書館による学校図書館への援助。

・図書館の仕事の意義。

教室での「教」と図書館での「育」とを、親・教師・本人が統合することで成り立つ「教育」は、一生の仕事である。

2 これからの図書館の展望

図書館の充実

2006年、日本図書館協会は「豊かな文字・活字文化の享受と環境整美」図書館からの政策提言の中で「中学校区ごとに一つの図書館がほしい」と提言した。そのためには、図書館員は図書館教や図書館の充実・発展ばかりを目的とするのではなく、その地域の人々が満足するようサービスを提供できる図書館をめざすべきだ。

3 図書館で働く人

①子どもの本について、知る努力をする。

②人と本のかかわりについて、よく知っている。

③人と本を結びつけるための柔軟な姿勢で対応ができる。

④この仕事を通して、人のために働くという強い意志と健康を持っている。

⑤一番大切なのは、子どもと目の高さを同じにして対等の関係を結べるように、いつでもすぐ曲げられる「ひざし」を持っていること。司書資格と共に、このような「ひざし」を持つ人を選んで下さるよう、教育委員会には特別にお願いしたい。図書館は「人」によって良くも悪くもなるものだから。

公立図書館・学校図書館で働く人の資質の向上と、その資質と意欲を備えた人たちが仕事に専念できるといふ環境を作ること。そのため息の長い努力が必要だ。この仕事を着実に進めることは、

だ。レファレンス機能と連動しながら調べ物をするのに便利だと思ふ。そのレファレンスはコーナー形式になっており、もっとゆったりとしたスペースが必要のように思われた。今や図書館の花形ITビジネスコーナーはピカピカの機器が並んでいて、職員が立ったまま応対していた。

本は独自の分類で、入口から続く中央通路付近にはビジネス書、外国語本が左右に並び、利用度の高い文学書関係は奥の方に配置されている。来館者が目的の書架にたどり着く前に様々な種類の本を目にする事ができるようにとの配慮からだそうだ。脇見の効用を狙っているという事か。書架に本が少ないのは、貸出しが一回三の冊までと多いからかもしれない。二週間で三の冊としたことや、長く人が並ぶ受付におしゃれな丸いテーブルが二つだけ、一部板張り

の床などが気に入ったことであつた。休館は原則月一回、週日は午後十時まで開いているそうだ。入口にある検索機で欲しい本を探し、なければ予約するとして、それらの作業はすべて機器でできる。貸出しも返却も予約した本の受取りも全て機器でOKだ。予約を含めて本を入手するまでの一連の手続きに「人」が介入せず、利用者は全く声を出さずに済むという事は、機械化して人件費は大いに削減されるだろうが、何か心に満たされないものを感じる。これを「便利」というのであろうか。

この最新の設備機能を持つ新設の公共図書館は、それらを活かして、住民にかかわりながら情報提供の機関としての役割を果たしていくに違いない。そしてより一層住民の知的要求を満たすことに寄与するだろう。その

ことを、隣接の図書館飢餓に悩む松戸市民として、羨望を込めて心から願う。

その後三度ほど足を運んだ。一度目は借りたい本を検索した結果八冊のうち所蔵してないのが四冊あつたが、区外の人はいくエーストできないので諦める。他の三冊は貸出し中。もう一冊は区内他館にあつたので、計四冊予約をした。二回目はその二日後、電話で区内の図書館にあつた一冊が用意できたと連絡があり、行って受け取つた。三回目は返却と借り出し。返却期限を過ぎていても注意を受けることもなく、返却口に差し入れて終りであつた。これらの間、私は意識したわけではないが、無言のまま手続きを済ませた。予約した三冊は、三ヶ月ほど経つが、まだ連絡はない。



第九回

千葉県内図書館関係

市民団体連絡会

報告 青木和子

200年1月24日(日)、佐倉市志津図書館で開催されました。参加は6団体(市川・市原・君津・佐倉・千葉・松戸)。担当は佐倉市地域文庫連絡会でした。

はじめに志津図書館長の足立さんが佐倉市の図書館について話され、その後、会の終了時まで参加されました。

続いて常世田良さん(日本図書館協会理事)から、日本の図書館の状況について話して頂きました。

・民間委託については、総務省の担当者が全国自治体の担当者会議で「指定管理者を入れる時は、サービス低下などに気をつけるよう

に」と述べ、「コスト削減」という言葉は使わなかった。

・昨年11月の院内集会に国会議員の政策秘書の参加が多かったことは評価すべきだ。

・世界の多くの出版物を電子化している「デジタル」や各国の取組に比べて、日本は立ち遅れている。

・図書館が窓口となって、消費者庁や医療の情報・就労情報を「課題解決型サービス」として提供するようになった。

就労支援(緊急雇用対策)として、文部科学省が「図書館海援隊」プロジェクトを立ち上げ、有志の図書館がハローワーク等関係部局と連携しながら、貧困・困窮者等に対する雇用・住居・生活支援に関するワンストップサービスなどの施策を実施し始めている。

後半は、各団体から現状や問題点などが報告されました。

「図書館友の会きみつ」の田野正人さんが君津市図書館協議会会長に就任されました。ご活躍を!! 次回は、今年6月に市川図書館友の会担当で開催の予定です。

今回も、交流会の開会前に志津図書館を見学しました。

評判が良い図書館はどこも、広々とした平面に文の低い書架がゆつたりと配置され、明るい外光が差込み、多種多様な新聞雑誌が並び一画には座り心地の良い椅子が置かれ、視聴覚コーナーには何台もの機器が並び、という光景が見られますが、志津図書館も同様でした。参考図書・郷土資料・児童書・グループ学習室・個別学習室なども;今回もまた、素敵な図書館に出会えた幸せをかみしめました(羨望を込めて)。